

われる。審問、洗礼、婚姻、埋葬関係文書は、当時の住民の動態を具体的に把握するのに役立つ。また、修道会文書には、植民地支配が確立しなかった地域における布教関連の民族誌的記録にも貴重なものがある。

AAM文書は、1976年以来、分類・整理の近代化および保存・修復が進められ、1987年以来、イントラムロスのマニラ大司教座の一角で、研究者に公開され、収蔵文書目録も出版された。スペイン期初頭から現在に至る教会関係文書約300万を収めている。文書は、大司教座の機能にしたがって、4つの文書群に分けられ、主題に従って下位分類されている。人口統計関連の文書は、モルモン教会によってマイクロフィルム化されている。

ドミニコ会文書は、至聖なるロサリオの聖母管区文書館(APSR)文書とサント・トマス大学文書館(AUST)文書がスペイン期の歴史資料として重要で、17世紀文書も相当数保存されているが、フィリピンだけでなく、日本、中国、台湾、トンキンへの布教関係文書も含まれている。AUST文書は、大学構内の神父館に収蔵されているが、APSR文書は、近年、スペイン本国に移された。マイクロフィルムもあり、サント・トマス大学図書館に保管されている。

上記PNA文書やAAM文書には、スペイン語資料と同時に現地語資料も多数含まれている。また、民間に保存されているスペイン期の現地語資料の発掘およびその利用も進展してきている。

資料・研究短報

日本国政府アンコール遺跡救済チームの活動概要

成田 剛(早稲田大学理工学総合研究センター研究員・
日本国政府アンコール遺跡救済チーム統括補佐)

1.はじめに

アンコール遺跡においては、今世紀初頭、フランスがそれらの保存修復に着手し、近年ではインド、ポーランド、インドネシアといった国々や、アメリカ、ハンガリーの財団、日本では上智大学なども保存修復作業に参加している。

日本国政府は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金によりアンコール遺跡の保存修復活動に貢献すべく、1992年から2年間の予備調査期間を経て1994年に、日本国政府アンコール遺跡救済チーム/JSA(Japanese Government Team for Safeguarding Angkor)を組織し(統括責任者:中川武早稲田大学理工学部教授)、「王宮前広場(プラサート・スープラとそのテラス)、バイヨン(北経蔵)、アンコール・ワット(外周壁内北経蔵)の保存・修復、及びバイヨン寺院の保存・修復計画の立案」プロジェクトに着手した。既に発行済みの報告書・資料を要約し、JSAの活動概要を報告したい。

2.対象遺構と目的

1)バイヨン北経蔵の解体再構築およびバイヨン寺院全体の保存修復ためのマスタープランの策定

危機に瀕した多くのアンコール遺跡の中でも、全体として最も危険な状態にあるのがバイヨンであり、特にその北経蔵は全壊の一手手前であった。この北経蔵の解体を伴う調査、修復工事を通して得られる建築、考古、地盤等のデータを基礎資料として、全体の総合的調査研究を行い、バイヨン全体の保存修復計画を策定する。

2)アンコール・トム王宮前広場のプラサート・スープラ

この王宮前広場は、東南アジア世界には極めて稀な荘厳な広場であり、近代カンボディア史においても、1950年代に現シアヌーク国王が収穫祭等の伝統行事を行うなどの由緒がある。これも崩壊一步手前のプラサート・スープラの塔の一部を解体修理し、構造、形態とも不明なそのテラスを解明し、伝統文化再興の場として再生することが望まれる。

3) アンコール・ワット外周壁内北経蔵

アンコール・ワットは、アンコール遺跡を中心としたクメール建築様式の集大成でもある。アンコール・ワットそのものは特定の部分を除いて差し迫った危機にはないが、中央塔基壇や外回廊庇繋ぎ梁などに近い将来根本的な修理が必要となるであろう。本北経蔵については、四方向ポーチ部分の屋根が崩落しており、徐々に劣化が進行している。一部解体を伴うこの修理過程の技術的問題を現場において全て解放し、将来のアンコール・ワット修復のための国際協力の前段階としてのオープンサイトに位置付けたい。

3. スケジュール

本プロジェクトにおいては、1994年11月～1998年10月(4年間)を第1フェーズ、1998年11月～2002年10月(4年間)を第2フェーズと位置付ける。第1フェーズでは、上記3遺構の基礎的調査及び修復基本設計、バイヨン北経蔵の解体・再構築工事を予定している。

4. JSAプロジェクトの特徴

本プロジェクトは、これまで各国の行ってきた修復の成果・課題を踏まえつつ、

- 1) 修復前の関連多分野にわたる総合的かつ綿密な調査の実施、調査結果の記録・公開
- 2) 国際的枠組みの中でのコンセンサスに基づくプロジェクトの進行
- 3) 今後の修復事業を念頭においた、修復仕様の作成を含めた工事作業の記録・公開
- 4) 修復工事における建造時の工法の可能な限りの尊重
- 5) カンボディア人自らの手による保存修復実施を目的とした、各分野専門家及び技術者の養成

などを特徴として進行している。

5. 現在までの主な活動経過

1994年6～9月の第4次調査以降、1996年7～9月の第10次調査に至る間、年3回の現地調査団を派遣し、建築、考古・文化人類、地盤・地質・環境、岩石、保存科学、測量、都市計画、修復設計、美術史等の専門分野における調査を実施中である。また、1996年9月現在、建築学及び考古学の専門家が現地に常駐し、長期間に渡る修復プロジェクトに対応する体制をとっている。

バイヨン北経蔵に関しては、第7次調査(1995年夏)からは修復工事実施へ向けての仮設工事など準備工事に着手し、第9次調査(1996年春)期間に建築本体の解体工事を実施した。1997年以降、基壇の解体、再構築工事を進める予定である。また、プラサート・スープラに関しては、修復に先立ってテラスの形状と増改築の過程を明らかにするための発掘調査を主体に作業を進めている。

第4次調査以降は、プノンペン芸術大学建築学部と考古学部のカンボディア人学生をそれぞれ5～7名調査団に加え、遺跡保存修復専門家養成のための実地における各種研修を実施している。加えて、現地作業員を対象に年間を通じて主として、1) 測量、2) 発掘及び出土遺物整理作業、3) 石材加工及び彫刻、4) 部材洗浄及び破損部材接合作業、5) 仮設工事その他、6) 油圧式移動クレーンなど工事用重機操作、7) 吊荷玉掛け作業、8) 石工事、といった分野における技術者の研修・育成を進めている。

6.おわりに

これまでの調査・研究の成果は、毎年7月、年次報告書の形にまとめて発表している。これまでに、「アンコール遺跡調査報告書1995」、「アンコール遺跡調査報告書1996」の2冊を発行済みである。今後も報告書やパンフレットの発行、シンポジウムや報告会の開催などを通して成果の公表を続けていきたいと考えている。

第14回国際アジア歴史者会議

友部 愛

第14回国際アジア歴史者会議14th Conference of the International Association of Historians of Asia (IAHA)は1996年5月20-24日、チューラーロンコーン大学主催のもとバンコク市内同大学において開催された。名誉顧問にシリントーン王女を仰ぎ、実施委員長Piyant Bunnag教授、副会長石井米雄教授、Taufik Abdullah教授、K. M. Mohsin教授の三氏、事務局長Dhirawat na Pombejra博士のもと、文学部ポーロマラーチャグマリ館を中心会場として実施された。参加者は、総数約300名を数え、その内海外からの参加者は約200名であった。日本からの31名をはじめとして、マレーシア(17名)、インド(14)、中国(14)、オーストラリア(14)、アメリカ合衆国(12)、フィリピン(11)、バングラデシュ(9)、インドネシア(9)、ベトナム(9)、オランダ(7)、シンガポール(6)、香港(6)、英国(5)、スリランカ(5)、台湾(R.O.C.)(4)、ネパール(2)、ニュージーランド(2)、ベルギー、カナダ、チェコ、デンマーク、フランス、ドイツ、イタリア、メキシコ、ポルトガル、スコットランド、スウェーデン(各1名)、地元のタイ王国からは97名が参加した。ただし、これらの数字に当日登録者は含まれていない。また現住所を連絡先としているため、在外の研究者、留学者等は在留先の国別登録扱いとなっている。

会議は11のセッションに分かれ、08:45-10:15、10:30-12:00、13:30-15:00、15:15-16:45の時間割で21日から23日まで続けられた。20日開会式でのパネルディスカッションでは歴史の未来と使命について、Civilization - Globalizationの系譜を機軸として、その理想の表明というべき極めて広い見地から討論がなされた。更に21日、22日には、17:00から特別講義があり、21日はWang Gungwu教授が"Nation - Building in Asia and Theories of Nationalism"と題して話された。

各セッションはテーマ別に約7会場に分けられ、そのテーマは、Monarchies、Colonial Period、Women/Family、Post World War II、Literature / Journalism、Migration / Minorities、Arts、Javanese Literature and Histography、Historiography、World War II、Contemporary Religion、Colonial Period & Vestiges、Early Modern Period、Pre - History / Early History、State Formation、Chinese Influences、War & Military、Buddhism、Local History、States & State Formation、Environment / Geography、Europeans in Asia、Contemporary、Buddhism in South East Asia、Esarn / Southern Textilesであった。

各会場の掛け持ちを余儀なくされ、あくまでもその範囲内であるが、筆者の印象に残る論文、議論には次のものが挙げられる。方法論として、各国語史料に対する精緻な本文批判を駆使し、かつその範疇に留まらない手堅い論考として、山本信人" The Rise of Roman Pitjisan and its Institutional Bases : Cultural Politics in the Late Colonial Indonesia"、加藤久美子" "Taxation"systems in Sipsongpanna in the "Pre - liberation" Period : with Special Reference to